

現任校と原籍校を結ぶ、時空と教科を超えた国際理解教育

前在日本国大使館付属ジャカルタ日本人学校 教諭

兵庫県明石市立高丘中学校 主幹教諭 増田 恵津子

キーワード：インドネシア、ジャカルタ、総合的な学習の時間、国際理解教育、教科横断型

1. はじめに

ジャカルタ日本人学校に赴任するにあたって原籍校の生徒に挨拶をした際、「ジャマイカ？じゃあ、ボルトに会えるね」という生徒の予想外の反応を受けた。ジャカルタが赤道直下にあるインドネシアの首都であり、インドネシアは世界有数の親日国でもあるということなどほとんど知らない日本の生徒たちに「私がジャカルタの親善大使になって日本の生徒たちに伝えなければ！」と決意した。そして、原籍校の学校HPに「ジャカルタを吹く風」というコーナーを持ち、2年間の赴任期間に毎週ジャカルタの様子の写真と共にコメントを掲載した。

原籍校では私の「ジャカルタを吹く風」を教材として社会科の授業で活用してくれた。また、ジャカルタ日本人学校の生徒とのやり取りを通して、ジャカルタでの生活やインドネシアについての生の声を聞くこともできた。ここに約5000キロの距離を超えて相互で学んだことを報告したい。

2. 「ジャカルタを吹く風」(「明石市立高丘中学校HP 平成29年4月～平成31年3月」)

号	タイトル	号	タイトル	号	タイトル	号	タイトル
1～2	ジャカルタ日本人学校	25	犠牲祭	47	中国正月	70	ヘリテージレクチャー
3	南国の入学式	26	ボロブドゥール	48	日本からの手紙	71	小学部へ読み聞かせ
4	危険生物	27	ルアックコーヒー	49	和菓子を作ろう	72	合唱コンクール
5	ショッピングモール	28	バティック工房	50	卒業式	73	委員会活動
6	三カ国語	29	体育祭	51	入学式	74	インドネシア語授業
7	芝生の校庭	30	一斉下校	52	オリエンテーション	75	日本武道代表団来校
8	スンパコ	31	赤道直下の国	53	鯉のぼり	76～77	カリマンタン島
9	断食	32	日本人学校の校歌	54	ハラールフード	78～79	現地校交流
10	パンチャシラ	33	立志式	55	チチャック	80	キャリア教育講演会
11	断食明け	34	ハロウィン	56	ラマダン	81	バリ島ケチャダンス
12	子どもの遊び場	35	TK(幼稚園)実習	57	ブカ プアサ	82～84	ブルネイ国訪問
13	レバラン休暇	36	現地校視察	58	日本国大使館訪問	85	三大風土病
14～16	バリ島	37	小中部活動	59～60	レバラン休暇	86	うなぎキャラバン
17	ハラルビハラル	38	インドネシア語授業	61	学校のエントランス	87	避難訓練
18	スンダ・クラバ港	39	インドネシア国会訪問	62	喫茶プランギ	88	高校受験
19	バンドン会議	40	日本語学習の時間	63	小学部アトリウム	89	インドネシア語授業
20	タンクバンブラフ山	41	書き初め大会	64	JJSフェスティバル	90	ボゴール植物園
21	モナス塔	42～43	スマトラ島	65	2018アジア競技大会	91	フルーツ王国
22	イステイクラル・モスク	44	日イ友好親善スクール	66	二学期始業式	92	世界一の職員室
23	独立記念日	45	インドネシア語授業	67	SingOutAsia 来校	93	豊富な食材
24	食堂	46	ヘリテージレクチャー	68～69	体育祭	94	Berangkat(出発)

3. 原籍校での取り組み（「月刊 兵庫教育 12月号 2017」）

(1) 授業での取り組み（原籍校の社会科教師からの実践報告を元に）

社会科の授業で「外国の文化と日本の文化の違いを考えよう」というめあての元、インドネシアについて学習した。インドネシアの位置、人口、面積、人口密度、首都等、既習事項の再確認をした。教科書には気候、衣食住、農業についての記載がある。基本的な知識を整理したのち、「ジャカルタを吹く風」を各自で閲覧しながらワークシートの課題に挑戦した。生徒たちからは「こんなことは日本ではないなあ」「初めて見たなあ」等々の声が聞かれた。「違い」を十分に見つけ、その上で「異文化尊重」「共生」について考えた。以下、生徒の感想である。

・ 国の文化が違うことは当たり前のことなので、違いを理解し合いながら暮らしたり協力したりすればよい。
・ 同じ国に生まれていても、民族・宗教・文化が同じだとは限らない。同じ国に住んでいるからこそ共に助け合い、支え合わないといけないと思う。
・ 私がジャカルタのことをよく知らなかったように、まだ知らない国は、たくさんある。知ることが、尊重する気持ちにつながる。まず、異文化を知る、気づくことが大切だ。
・ 宗教が違うから共生は難しいと思っていたことを、我ながらダメだと思った。
・ やり方が違っていると不思議に感じたり変に思ったりすることがある。しかし、それがその国らしさであり良さだ。今日の日本の良さも感じた。両方感じたことが共生なのかな？
・ ジャカルタについて調べていくに従って印象が、どんどん変わっていった。
・ 国が違うとこんなにも違うのか。違いを知ることができてよかった。他の国も家で調べてみようと思った。
・ ジャカルタは授業で勉強したけれど、知らないことであふれていた。比べてみると似ている所もあり、日本の文化が伝わっていると思った。

教師が考えていた以上に、生徒たちは「異文化理解」「共生」としっかりと向き合っていた。一人ひとりがこの授業をきっかけに、国際理解に向けて、第一歩を踏み出しているように感じた。



社会科の調べ学習の様子

1年生 社会科 ワークシート
めあて 外国の文化と日本の文化の違いを考えよう
1年3組 氏名 ()

国データを確認しよう

	日本	(インドネシア)
人口	12822(万人)	25216(万人)
面積	38(万km ²)	191(万km ²)
人口密度	339(人/km ²)	132(人/km ²)
首都	東京	ジャカルタ

ホームページで、日本と比べてみよう。日本との違いを見つけよう。

知っていたこと	知らなかったこと
	イクトバス 授業時間は50分 体育祭と色別対抗(赤,白,青,黄,緑) コーヒー農園が有名 大建跡や王宮跡 ボロアトール 転入生小中合わせて約7万人 インドネシア独立記念日7/17 学校にも イスラム教信→1日5回礼拝 学校にも 断食(約1ヶ月間) 礼拝堂がどこにでもある

【異文化の尊重】【共生】について、あなたの考えを書いてください。

たくさん外国で文化を伝え合... (ほとんどの国の人がいろんな国の文化を知っていることが大切だ) と思う。そして文化を伝え合うことで共生にもつながり、たくさん外国の人といろんな関わりや、つながることによって、いじめや差別などが減っていき、平和な世界になると思う。

今回の授業の感想を書いてください。

今回、インドネシアについて調べてみて、私にはわからないことがあつて、調べていくにつれて、無くてびっくりしました。でも、ホームページを見てみてたくさん知ることができたので、良かったです。そして、先生、や異文化尊重、について教えてくれることができて、また機会があればホームページを見たいです。

社会科ワークシート

(2) 保護者の方の感想

明石市立高丘中学校のHPの「ジャカルタを吹く風」のコーナーを閲覧して下さった保護者の方々の感想もいただくことができた。以下掲載する。

・遠い国なのに身近に感じることができる。学校の始まりは7時30分。交通渋滞の緩和などから、日本と比べて、1時間も早いと知りビックリ。うちの子ども達であれば毎日遅刻だな…
・バリ島には家族が住んでいて毎年家族で帰省する。そのため、「ここ知ってる～」と思って見ている。ジャカルタはバリ島と違い更に日本との違いにビックリする事が多い。‘Sampai jumpa lagi’ (また会いましょう)
・コーヒーは好きでよく飲む。コーヒー豆の産地でよく目にするのは南米やアフリカが多い。確かにまれにインドネシアも見かけた事があった。ジャコウネコの姿は初めて見た。思いの外、可愛かった。味わえる機会は、残念ながらなかなかさそうだが、いつか飲んでみたいなあと、より一層思いが強くなった。
・パティックの製作工程が興味深く、実物を見てみたくなった。現地に行かなければ知ることもできないような、独特な宗教行事や文化も知ることができて、本当に楽しみにしている。
・一斉下校に関してバスに先生が同行し一人ひとりを実際に家まで送り届けるのは大変な事だ。訓練していることに対してもバスの台数の多さも日本では考えられない。日本は治安もすごく恵まれていて安全な事に感謝。

4. ジャカルタ日本人学校と原籍校との交流授業

(1) ジャカルタ日本人学校から原籍校へ

ジャカルタ日本人学校中学部3年生の「総合的な学習の時間」は小学部から9年間学んできた異文化理解の集大成である「インドネシア」である。縁あってインドネシアで生活することになった生徒たちが自分の住んでいる国を総括的に学ぶ。カリキュラムの中にはインドネシア語の授業や、現地校交流、日本国大使館訪問、インドネシア国会訪問などの行事も含まれている。過年度生も「インドネシアを伝える」をテーマとして新聞作成を行っていたが、今年度は原籍校にも協力を願い、実際に日本の中学生たちに新聞を届け、生の感想をもらい、再び自分たちに還元するという授業を計画した。まず日本の生徒たちに伝えたいテーマを決めた。「生活」「自然」「文化」「宗教」など日常生活を海外で送る生徒ならではの視点から、普段不思議に思うことや日本と比べての相違点などを調べたり、体験をまとめたりして、日本の中学生にわかりやすく「ジャカルタ新聞」を作成した。新聞作成はこれまで調べ学習などで行ったことはあるが、実際に読み手を想定し、感想を求める新聞作成は初めてのことで生徒たちも特に主体的に取り組むことができたと感じる。



原籍校に掲示されているジャカルタ新聞

(2) 原籍校からジャカルタ日本人学校へ (原籍校の国語科教師からの実践報告を元に)

作成したジャカルタ新聞をデータにして原籍校に送った。原籍校では国語科の授業で、インドネシアから送られてきた新聞を無作為に生徒に配布し、読んで感想を書く授業を行った。1年生と2年生のすべてのクラスで行ったので、1人の新聞に対して6、7名の感想が集まった。それらの感想は日本からジャカルタに郵送で送られた。日本から届いた新聞の感想を生徒たちは喜んで読んだ。自分たちの書いた文章や、イラストが上手く伝わったかどうか不安だったが、力強い感想をもらえて、この新聞作成を行った達成感が見られた。また、原籍校からは「雪が降らない国へ」というタイトルのスキー実習で作成した新聞も届けてくれた。インドネシアでは経験できないスキーの様子を生徒たちは興味深く見ることができた。



原籍校からのスキー実習新聞や感想文を読むジャカルタ日本人学校の生徒

5. 成果と課題

(1) 成果

- ・日本、インドネシアのそれぞれに住む中学生が時間や場所を超え、多様な文化理解と尊重の精神を学び、彼らが生きるグローバルな社会を肌で感じ、実践できる力を身に付けさせることができた。
- ・社会科の教科書で学ぶ外国について、その国で生きる人たちを知るとはどのようなことかを日本にいる中学生に伝えることができた。
- ・新聞作成は生徒に読み手の立場に立つという視点をもたせることが大切であることを学ぶことができた。
- ・教師がインドネシアの様子を伝えるよりも、同じ中学生が伝え合う方が、断然興味関心をもつことが実感としてわかった。
- ・スマホ時代と言われるが、あえて郵便を使うことで、封を開ける楽しみを生徒たちと味わえた。
- ・総合的な学習の時間、国語科、社会科等、教科の枠を超えた授業を相互で実施することができた。これは生徒だけではなく教師にも新たな取り組みで充実感を得ることができた。
- ・原籍校だけではなく、「月刊 兵庫教育」に執筆する機会があり、広く教育現場に取り組みを発表することができたことは非常に価値があった。

(2) 課題

- ・私は2年任期だったので、交流した当時の生徒が原籍校に在学している。生徒に生の声を伝える機会はまだあるので折りをみてジャカルタの様子を今後も伝えていこうと思う。

6. おわりに

ジャカルタ日本人学校に原籍校から卒業ビデオが送られてきた。生徒会長が自己紹介と「卒業おめでとうございます」のメッセージをインドネシア語で届けてくれたのだ。生徒会長は、父親がインドネシア人であることをそれまで知らせていなかった。父親の祖国であるインドネシアのことを原籍校の中学生に伝える機会を持つことができ大変光栄だと語っていた。ジャカルタ日本人学校にも両親のどちらかがインドネシア人の国際家庭が多い。生徒たちの手による国と国との懸け橋ができたことを両校とも肌で感じる事ができたように思う。